

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

| | |
|-----------|---|
| 分類 | 地域活性化／バイオマス資源利用 |
| 手法名 | 農林漁業の営みによる生きもの保全と資源活用 |
| 主体 | 福島県鮫川村 |
| 背景(地域の課題) | <p>福島県鮫川村では、従来から里山資源と畜産、稲作、畑作を組み合わせた循環型の資源利用による農林漁業を営んできた。</p> <p>しかし近年高齢化が課題となっており、耕作放棄地の増加が懸念されている。そこで地域資源の新たな活用や生き物の生息環境保全という視点の導入など、大学等とも連携しながら人が集まる村づくりを目指した取り組みを進めようとしている。</p> |
| 手法／方策の詳細 | <p>鮫川村では「マメで達人なむらづくり」をスローガンに、大豆加工をはじめとする各種の産品開発、保全活動及び発生するバイオマス資源の新たな活用、首都圏の大学をはじめとした都市との交流などに取り組んでいる。</p> <p>(1)里山と農業の循環型の資源利用による生き物保全と新たな活用 里山の有機質肥料(落ち葉・稲わら・畜産)が水田のプランクトンを発生させ、そのことによってカエルをはじめとする両生類、ホタルをはじめとする昆虫類を育てている。また、村内にある498の谷戸(地元では「沢」と呼ばれる)における水田耕作は、サシバをはじめとする野生生物の餌場としても適しており、豊かな里山生態系を形成させている。 こうした農林業の営みを基盤にしながら、大豆加工による産品づくり、村中心部の館山の整備再生(写真1)、ビオトープ造成による生き物保全活動に取り組んでいる。さらに保全活動によって発生するバイオマス資源を村内の産直や宿泊施設の暖房に利用したり(写真2)、最新の薪ボイラーを導入し温浴施設で利用するなど(写真3)新たな活用にも取り組んでいる。</p> <p>(2)取り組みを介した学びと交流の促進 取り組みを通じて、首都圏の農業系大学等との連携を深め、産品開発の精度を向上させると共に、保全活動等で学生との体験交流活動を促進している(写真4)。</p> |
| 手法・技術的視点 | <p>かつての村の循環型の農林業の営みと暮らしを、生き物や新たなバイオマス資源の活用という視点からとらえ直し、生き物の保全と営農の活性化の両立を図っている。</p> <p>取り組みに合わせて各種の交流活動や施設整備等も行っているが、いずれも村に見合った無理のない事業規模で展開させている点は、他の小規模な中山間地域での事業推進上においても参考になるものと考えられる。</p> |

| | |
|-------------------------|---|
| <p>実行プロセス・運営体制のイメージ</p> | <p>(1) 鮫川村の村づくり活動の要素</p> <ul style="list-style-type: none"> 産品開発と新たな資源利用 <ul style="list-style-type: none"> 大豆加工による産品化 村内温浴施設への薪ボイラーの導入等によるバイオマスの利用促進 保全活動 <ul style="list-style-type: none"> 中心部館山の再生整備 地域環境を活かしたピオトープ作り 谷津田の保全と管理 環境教育・交流活動 <ul style="list-style-type: none"> 東京農業大学との交流 地元小学校におけるふるさと学習の推進 <p>(2) 鮫川村の農業と循環型の資源活用</p> |
| <p>図・写真資料</p> | <p>写真1: 村中心部の館山の再生整備活動。支障木の伐採と多様な樹種による植栽による自然共生園作り。</p> <p>写真2: 村内の公共施設には薪ストーブ等が設置されバイオマス利用を進められている(写真は産直施設てまめ館)。</p> <p>写真3: リニューアルされた温浴施設には最新式の薪ボイラーが設置されている。</p> <p>写真4: 谷津田で田の草取り作業をする東京農業大学の学生。年6回程度村を訪問し谷津田の維持保全活動に従事している。</p> |
| <p>参考資料</p> | <p>平成24年度里なび研修会in福島県パワーポイント資料(鈴木治男氏)、「里山の自然とくらし福島県鮫川村」(東京農業大学短期大学部生活科学研究所編)</p> |